# 明治・大正期の文末表現
## ——終助詞「わよ」——

又 平 恵 美 子

キーワード：明治・大正期、わよ、花柳界のことば、女学生のことば、相互承接

要　旨

近代から現代における文末表現の中で、女性的な表現といわれる終助詞「わよ」について、その発生の時期から普及していく過程を、使用されていた位相、使用法などを小説や戯曲などの文学作品やエッセイを資料として考察する。その結果、少なくとも文学作品を発表する表現者側からは、明治30年代においては「わよ」が花柳界のことばとして意識されていたこと、明治40年代からその意識がない作者もあらわれてきたこと、また読者一般にとっては大正期には「わよ」を目にする機会も増えてきていたであろうことが認められた。

## 0. はじめに

現代日本語の女性のことばの文末表現を研究する場合、終助詞の「わ」に「よ」が承接した「わよ」は、女性専用形式の代表的なものとして扱われることが多い[*1]。ところが、かつては、一般的な女性のことばとして使用することに難色を示した人物があった。巌谷小波の子である巌谷大四のエッセイ(1964)には、次のようにある。

(1)　私がまだ子供の頃、姉たちが、言葉づかいのことで、母によく小言を言われているのを聞いたことがある。
　私には三人の姉がいたが、その姉たちが話し合っている時に「…だわよ」とか「いいわよ」とか、いわゆる「わよ言葉」をつかうと母が『わよ』なん

*1　なお、平成期の現在での実際の使用については、遠藤・尾崎(1998)では、「わよ」だけでなく「わ」自体が「衰退に向かって」いるという推測がたてられている。

て言葉は下品ですよ、『ことよ』とおっしゃい」と言った。
つまり、「いいわよ」というときには「いいことよ」と言い、「…だわよ」というときは「…ですことよ」と言えというわけである。大正の終りから昭和の初年の頃のことだったが、その頃は、どうやら「わよ言葉」が流行して、それは「下品な言葉」ということになっていたらしい。

『明治文學全集20』(筑摩書房)の巌谷小波年譜によると、大四は大正4年生まれ、子供の頃は当時の芝区高輪南町に住んでいたようである。なお大四の母親は明治31年に小波と結婚、近江の水口町山村徳次郎末娘とある。また三人の姉というのは、それぞれ明治36年、明治40年、大正3年生まれである。
大四は、この母親の小言の根拠を次のように考える。

おそらくその頃「わよ」という言葉がやたらにはやって、明治生まれの母には鼻もちならなかったのだろう。多少「上流社会」の人間という意識があって「下層階級」の人間のつかう言葉を軽蔑していたのだろう。

小松(1988)は「品が悪いとか聞きにくいとかいう非難は、一般に新しい言い方や下層の特色に向けられることが多い。」と述べている[*2]が、「わよ」は明治から大正期の文学作品に用いられている例があることから、「新しい言い方」には該当しない。
また、この頃は、ちょうど松村(1957)のいう東京語の時代区分の「関東大震災による東京の住民の分布状態の変化」によって、山の手言葉と下町言葉との差異が減少する時代にあたる。これを単純に直結すれば「わよ」は下町言葉に由来するもので、関東大震災を契機に山の手言葉に流入してきたのではないか、ということになる。ただし巌谷家の母親の感覚が、当時の同世代の者を代表するものである、というわけではないこと、また、大四は男性であるため、本人自身が実際に使用することばではなく、かつ子供の頃の記憶によるものである、ということ

*2 明治20~30年代頃には「てよ」「だわ」「のよ」「ことよ」を、女学生や貴婦人が用いるのは相応しくない、という批判が、下層由来の言葉であるということを根拠としてさかんにあった(山本(1965)、森(1969)、石川(1972)参照)。これに対し小松(1988)は明治20年代の小説での使用例の検討から「てよ」「だわ」への非難は下層由来というよりも「その新しさ故にひきおこされた可能性が強い」として、引用部分のような一般化をしている。

から、「大正の終りから昭和の初年の頃」に「わよ」が世間で流行したと断定することはできない。そのため、明治・大正期において一般に「わよ」がどのような層に用いられるものと意識されていたのかということを確認する必要がある。

本稿は、この過程をみるために、小説や戯曲等の文学作品を資料として用い、使用されていた例を個々に検討してみる。

## 1. 先行研究と問題点

明治時代初期に表れる「わよ」の語形は、明治4年の『安愚楽鍋』に、吉原の遊女屋別のきまり文句を列挙した場面で、「『くるハヨ』『ゆくハヨ』の岡本屋」という例が見られる。これについて小松(1988)は、次のように述べる。

> このワヨが一般女性語のワヨに連続してゆくという筋道も、むろん検討しなければならないが、可能性としては薄い。吉原の文化的影響力は、この頃ははなはだ衰微していた。

小松(1988)は、江戸語の「わよ」と東京語の「わよ」とは別のものであり、『安愚楽鍋』の「わよ」は江戸語の「わよ」として扱っているようである。

鈴木(1998)は、近代から現代の小説を資料に、女性の用いる終助詞を調査しているが、「わよ」に関する部分は、次のように記されている。

> 『安愚楽鍋』以後の資料では「わよ」は明治・大正期のものには出て来ない。遊女の使う遊里語であり、一般の人々は使わなかったのだろう。
>
> 「わよ」が資料に再び見られるようになるのは、取り上げたものの中では『蓼喰う虫』(昭和3年)が最初である。
>
> 「あたしーと幕だけみたら帰るわよ」

しかし、本稿筆者の調査では、明治後期から大正期にも「わよ」は散見された[*3]。

---

*3　「わね」も大正末期までみられないとしているが、鈴木(1998)で扱われた資料で明治後期から大正末期に該当する以下の5作でも、次のような用例数があった。

『金色夜叉』…わよ0例、わね2例　『不如帰』…わよ0例、わね0例
『明暗』…わよ6例、わね22例(含「だわね」1例)
『腕くらべ』…わよ8例、わね21例(含「だわね」1例「わねえ」12例「わねへ」1例)
『友情』…わよ0例、わね2例(「わね」のうち1例は手紙文)

そこで、まずこのことについて明らかにした上で、明治・大正期における「わよ」が、吉原に代表される花柳界のことばであったのか、あるいは別のものであったのかということについて、検討してみたい。

## 2. 資料の調査

資料としては、終助詞「わ」を使用している女性が登場する作品を中心に調査した。( )内の年代は、底本に記載されているものを原則とし、記載のないものは『現代日本文學全集99』(筑摩書房)の現代日本文學年表を参照した。出典の＊印は CD-ROM 版の『新潮文庫の100冊』『新潮文庫明治の文豪』を、＃印は『青空文庫』(http://www.aozora.gr.jp/)の電子化テキストを併用したことを表す。

また「わよ」の出現状況の参考のため、「わ」または「よ」の終助詞を用いて構成されている「てよ」(依頼表現は除く)と「わね」の使用の有無も調査した。

末尾の[ ／ ／ ]は、それぞれ[てよ／わね／わよ]の順に、例があるものを「○」ないものを「×」で表す。

[調査した資料]

明治４年 仮名垣魯文「安愚楽鍋」岩波文庫[×／○／○]
明治21年 三宅花圃「藪の鶯」現代日本文學大系5 筑摩書房[○／○／×]
明治22年 巖谷小波「五月鯉」明治文學全集20 筑摩書房[○／×／×]
明治30年 尾崎紅葉「金色夜叉」新潮文庫＊[○／○／×]
明治31年 徳富蘆花「不如帰」岩波文庫[○／×／×]
明治32年 広津柳浪「骨ぬすみ」『河内屋・黒蜥蜴』岩波文庫[○／○／×]
明治33年 小杉天外「初すがた」明治文學全集65 筑摩書房[○／○／×]
明治34年 中村春雨「無花果」現代日本文學全集34 改造社[○／○／×]
明治34年 柳川春葉「錦木」明治文學全集22 筑摩書房[○／×／×]
明治34年 山岸荷葉「紺暖簾」明治文學全集22 筑摩書房[○／○／○]
明治35年 内田魯庵「社会百面相」岩波文庫[○／×／×]
明治35年 草村北星「濱子」明治文學全集93 筑摩書房[○／○／×]
明治35年 小杉天外「はやり唄」明治文學全集65 筑摩書房[○／○／×]
明治35年 広津柳浪「雨」日本現代文學全集11 講談社[○／○／×]
明治35年 柳川春葉「秋袷」明治文學全集22 筑摩書房[○／×／×]
明治36年 菊地幽芳「乳姉妹」明治文學全集93 筑摩書房[○／○／×]
明治36年 國木田獨歩「惡魔」日本現代文學全集18 講談社[○／○／×]
明治36年 小杉天外「魔風恋風」岩波文庫[○／○／○]
明治37年 生田葵山「和蘭皿」明治文學全集22 筑摩書房[○／○／×]
明治37年 小栗風葉「豫備兵」明治文學全集86 筑摩書房[○／○／×]

明治38年　大蔵桃郎「琵琶歌」明治文學全集93筑摩書房〔○／○／×〕
明治38年　小栗風葉「青春」日本現代文學全集11講談社〔○／○／×〕
明治38年　夏目漱石「吾輩は猫である」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治39年　伊藤左千夫「野菊の墓」新潮文庫＊〔×／○／×〕
明治39年　岩野泡鳴「焔の舌」明治文學全集86筑摩書房〔○／×／×〕
明治39年　川上眉山「ゆふだすき」明治文學全集20筑摩書房〔×／○／×〕
明治39年　川上眉山「観音岩」明治文學全集20筑摩書房〔○／○／×〕
明治39年　夏目漱石「草枕」新潮文庫＊〔×／○／×〕
明治39年　二葉亭四迷「其面影」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治39年　村上浪六「八軒長屋」現代思潮社〔○／×／×〕
明治40年　泉　鏡花「婦系図」新潮文庫＊〔○／○／○〕
明治40年　佐藤紅緑「雲のひゞき」明治文學全集86筑摩書房〔○／○／×〕
明治40年　田山花袋「蒲団」新潮文庫＊〔○／×／×〕
明治40年　夏目漱石「野分」新潮文庫＊〔○／○／○〕
明治40年　夏目漱石「虞美人草」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治40年　二葉亭四迷「平凡」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治41年　大塚楠緒子「空焚」明治文學全集81筑摩書房〔○／○／×〕
明治41年　小栗風葉「懲ざめ」明治文學全集65筑摩書房〔○／○／×〕
明治41年　夏目漱石「三四郎」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治41年　正宗白鳥「何処へ」現代日本文學大系16筑摩書房〔○／○／×〕
明治42年　黒田湖山「腰かけられぬ人」明治文學全集22筑摩書房〔○／○／×〕
明治42年　田山花袋「田舎教師」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治42年　夏目漱石「それから」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治42年　森　しげ「波瀾」現代日本文學大系5筑摩書房〔○／○／×〕
明治43年　夏目漱石「門」新潮文庫＊〔○／×／×〕
明治43年　森　鴎外「青年」新潮文庫＊〔○／○／×〕
明治44年　小山内薫「大川端」現代日本文學全集17筑摩書房〔○／○／×〕
明治44年　田村俊子「あきらめ」現代日本文學大系32筑摩書房〔○／○／○〕
明治44年　森　鴎外「百物語」『山椒太夫・高瀬舟』新潮文庫＊〔×／○／○〕
明治44年　森　鴎外「灰燼」鴎外全集9岩波書店〔○／○／○〕
明治45年　秋田雨雀「埋れた春」現代日本文學大系32筑摩書房〔○／○／×〕
明治45年　夏目漱石「彼岸過迄」新潮文庫＊〔○／○／○〕
大正元年　夏目漱石「行人」新潮文庫＊〔○／○／○〕
大正２年　田村俊子「木乃伊の口紅」現代日本文學大系32筑摩書房〔×／○／×〕
大正２年　森　しげ「死の家」叢書『青鞜』の女たち7不二出版〔○／×／○〕
大正２年　森　鴎外「雁」新潮文庫＊〔○／○／×〕
大正３年　岩野泡鳴「毒薬を飲む女」現代日本文學全集13筑摩書房〔×／○／×〕
大正３年　素木しづ「三十三の死」現代日本文學全集85筑摩書房＃〔×／○／○〕
大正３年　相馬泰三「田舎醫師の子」現代日本文學全集85筑摩書房〔○／○／×〕
大正３年　夏目漱石「こころ」新潮文庫＊〔×／○／×〕
大正４年　徳田秋声「あらくれ」新潮文庫＃〔○／○／×〕
大正４年　夏目漱石「道草」新潮文庫＊〔○／○／×〕

大正４年 武者小路実篤「その妹」岩波文庫[○／○／×]
大正５年 永井荷風「腕くらべ」現代日本文學全集16筑摩書房[○／○／○]
大正５年 夏目漱石「明暗」新潮文庫＊[○／○／○]
大正５年 平沢計七「工場法」日本近代文學大系51角川書店[○／○／○]
大正５年 正宗白鳥「死者生者」現代日本文學大系16筑摩書房[×／×／○]
大正６年 志賀直哉「好人物の夫婦」『小僧の神様』岩波文庫[○／○／×]
大正６年 村井弦齋「小松嶋」現代日本文學全集34改造社[○／○／×]
大正７年 宮地嘉六「煤煙の臭ひ」現代日本文學全集85筑摩書房[×／○／×]
大正８年 有島武郎「或る女」岩波文庫＃[○／○／×]
大正８年 島崎藤村「新生」新潮文庫＃[×／○／×]
大正８年 武者小路実篤「友情」新潮文庫＊[○／○／×]
大正８年 室生犀星「或る少女の死まで」岩波文庫[○／○／×]
大正９年 菊池　寛「真珠夫人」菊池寛全集5文芸春秋[×／○／×]
大正９年 武林無想庵「ビルロストロのように」現代日本文學大系32筑摩書房
[×／×／○]
大正９年 田中　純「妻」現代日本文學全集85筑摩書房[○／○／×]
大正10年 芥川龍之介「母」芥川龍之介全集5岩波書店＃[○／○／○]
大正10年 川端康成「招魂祭一景」川端康成全集2新潮社[×／○／○]
大正10年 長谷川如是閑「象やの粂さん」現代日本文學全集85筑摩書房[○／○／×]
大正11年 武林無想庵「性慾の触手」現代日本文學大系32筑摩書房[×／○／○]
大正12年 宇野浩二「子を貸し屋」『蔵の中・子を貸し屋』岩波文庫[○／○／○]
大正12年 正宗白鳥「生まざりしならば」現代日本文學大系16筑摩書房[×／○／○]
大正13年 谷崎潤一郎「痴人の愛」新潮文庫＊[○／○／○]
大正14年 細田源吉「寡婦とその子達」現代日本文學全集85筑摩書房[×／○／○]

「わね」「わよ」には「だわね」「だわよ」以外に「あるわね」「いいわよ」のような動詞や形容詞に接続するものも含まれている。なお「わね」には明治期より「～ますわね」「～ですわね」のような丁寧体もあったが、「わよ」の「～ますわよ」「～ですわよ」は、今回調査した資料の中では、大正後期にわずかに例をみたのみであった。また「わよね」のような連接もなかった。

## 3. 明治後半から大正期の文学作品における「わよ」の使用例について

### 3.1. 花柳界の女性のことば

小松(1988)は、明治4年の『安愚楽鍋』の頃には、すでに吉原の文化的影響力が衰微していたとしているが、本稿では吉原に限らず、芸者やお酌（半玉）のことばに表れる例をとりあげて考察する。

例えば、明治44年の『百物語』では、お酌の発話に「一しょに乗りたいわよ、こっちへお出よ」という1例があった。しかし、この作品には芸者やお酌以外の女性が登場しないので、ここから花柳界のことばであったと断定することはできない。同様に大正5年の『腕くらべ』でも、登場する女性は芸者か元芸者であるため、花柳界以外に用いられていたことばであったかどうかの判断材料とはならない。また芸者やお酌だからといって必ず「わよ」が用いられているわけでもなく、例えば明治44年の『大川端』は登場する女性のほとんどが芸者かお酌であるが、「わよ」を用いている人物はいなかった。

この問題について示唆的なのが、『紺暖簾』と『あきらめ』である。両作品には、女学生と花柳界の者とが登場するが、両者の言葉遣いは異なるものとして描かれ、その特徴の一つに「わよ」の使用・不使用という違いがあった。

明治34年の『紺暖簾』は今回調査した中で最も早い時期に「わよ」が表れているものである。ここで「わよ」を用いるのは、お酌の菫子(14歳)と浪代(23,4歳)などの芸者だけであった。

(2)「遅くなつたでせう、御免なさいな。姐様が來たり何かしたもんだから。」菫子は罪を己に擔へば、「何、可よ。」「若かも叱られたら、私が止めたからつて言つても可わよ」　（菫子→客である暁之助）

(3)　でね、可くつて！貴方は私の事をお純つていふのよ。私も貴方の事を兄さんて言ふから、可くつて？さう言はないとお互つ事に漆箆にしませう、ね」「だつてお神様だの丶の前でも、さういふのかえ。」「え丶何所へ行つても」「何だか、少し極りが悪いな。」「いけないわよ、さう言はないと漆箆よ…！」（菫子→暁之助）

(4)「知らない芸者は否だねえ。」「始め知らなくつても、一度出れば直ぐお馴染になるわよ。私と一所に4月に出たんですけども、向は大きいから早く藝者に成れたの。可くつて？屹度懸けて？」　（菫子→暁之助）

(5)「お爺さん見たいのが金貸しで、ぼろ洋服を着てゐるのが執達吏だつてね。行って御覧なさい。私には何だか分らない事を言つて、大きな聲を出してるわよ。」（芸者やお酌同士の会話）

(6) 辻占ぢやないが大概にしてお前様、精々手放した方が、浪代姐ちやんのお爲だらうと思うわ。」浪代は煎餅と烟草の代わるがわるにしてゐたが、「それや、もう理屈言やあ、さうね…。けども姐さん、底もあれば實もあるわよ。考へて御覧な。五百圓てつて來たのは、あの痣ちやんが口利きなんだからねえ…。
(浪代→女将)

花柳界の菫子と浪代だけでなく、女学生であるお扇(18歳)と諦子(17歳)は、いずれも「てよ」「だわ」を用いている。ただしお扇、諦子は「てよ」と「(連用)て」による疑問形*4を多く用い「ございます」も使用するが、一方浪代は「てよ」は1例しか使用しておらず、普段のことばは女将と同様「のさ」「だよ」「だね」などを用いている。また菫子は「てよ」「(連用)て」の他、「のさ」も用いるが、「ございます」と「だよ」「だね」は用いないという言葉遣いになっている。この他、暁之助の継母お淑(32歳)や仲働きの篠やは「のさ」「だね」の他、「ございます」を用い、菫子の継母は「っけよ」を用いたりと江戸語的な要素を持っており、登場する人物の言葉遣いは多様であった。

「わよ」の用法については、(2)(5)(6)のように、相手に提案したり、単に相手が知らないことを教えたりする例や、(3)(4)のように、相手の思惑に反対する内容を提示する例があった。

また明治44年の『あきらめ』でも、「わよ」を使用しているのは、花柳界に養子に出ている貴枝(15歳)だけに7例あった。

(7) 力が余つて奴の傘が転倒になる。「あら。あら。濡れちゃつてよ。巫山戯ちや可けないわよ。」下地が渋面を作る。「あなた妾に惚れてゐるんぢやありませんか。威張れないわよ。」と扇子でその肱を突く。十五ぐらゐの口から済まして此様ことを云ふ。
(貴枝→踊りの稽古仲間)

(8)「お、痛つ。」と云つた仰山な声に緑紫が手を放すと、貴枝は四箇紅石が入つた指環の上から自分の手を撫でて顔を顰めた。「其様に強く持つちや痛いわ。乱暴だわよ。」
(貴枝→義兄の緑紫)

(9)「貴枝ちやんは何だつて欲しいものは阿母さんが買てくれるからいいぢやな

*4 「よくって？」のようなものを便宜上このように呼ぶことにする。

いの。」「幾何買つてくれても、まだ欲しいわよ。」富枝はその云ひ草がをかしく思はれた。（貴枝→実姉の富枝）

(10)「こんな着物でそんな所まで行かれないわ。外聞がわるいわよ。」貴枝は斯う云つて、それでも引っ掛けて出た友禅縮緬の羽織をいぢつて見た。（貴枝→富枝）

(11)「外へなんか出るのはいやよ、妾人形だけでも持つて来たかつたわ」「ぢや橋の辺までゆくのもいや」「明日がいゝわよ」（貴枝→富枝）

(12)「小さい時はほんとに泣虫だつたんだけれど、今ぢや可けないわ。」貴枝は高慢に、「大人になればもう泣きやしないわ。」と云つて蒲団の中でころころと笑つた。「大人になつても泣く人もあるの。」「ぢや馬鹿だわよ。」（貴枝→富枝）

富枝(女子大学生)と、富枝の後輩染子は「てよ」や「(連用)て？」を用いるが、「わよ」は用いていない。貴枝も「てよ」や「(連用)て？」を用いるが、女学生たちのように「ですわ」「ございます」は用いない。

また「わよ」の用例については、(7)～(12)のすべてが相手を態度や言動に対し非難したり反駁するという場合に用いられる傾向があった。

『紺暖簾』の作者、山岸荷葉は明治9年日本橋通油町のガラス問屋の生まれで、『あきらめ』の田村俊子は明治17年浅草区蔵前町の米穀商の生まれである。両者ともに下町の豊かな家庭に育ち、高等教育を受けたという点で、女学生と花柳界の者の両言語に対する描写は、かなり信頼のできるものであると思われる。

### 3.2. 女学生のことば

ただし「わよ」が女学生に用いられている例もないわけではない。女学生の使用例として今回の調査で最も早いものは、明治36年の『魔風恋風』で、女子大学に通う三浦絹子(18歳)の発話にあった。主人公の萩原初野(19歳)をはじめ、夏本芳江(18歳)などの女子大学生や、初野の妹の波(13歳)には「てよ」「(連用)て？」を用いる者が登場するが、「わよ」の使用例はこの1例だけであった。

(13)「あの、萩原様と、夏本様の許婚の大學生とは、非常に親密な間だツて事だが、それぢや、夏本様が可哀相…だなんて。」「まア、誰が其様な事を？」「貴女の様に、爾う一々氣に懸けても仕様が無いわよ。」絹子は困った様に顔を顰め、「執せ他の噂ですもの、妬る者の云ふ事たもの。」 (絹子→初野)

絹子については、「誰が言觸らしたともなく、横濱の女郎屋の娘として名が通つてゐる」とあり、他の級友は皆「中流以上の紳士の娘」なので、絹子は「何事にも一人除者にされる傾がある」ものの当人は一向に平気で活発である、という特異な存在として描かれている。孤例ではあるが、ここでの「わよ」の使用は絹子の出自を特徴付けるものとして描かれたことが考えられる。

今回調査した資料の中で、次に女学生のことばとして「わよ」が使用されるのは大正期になってからであった。大正元年の『灰燼』では、華族女学校に通う種子の応答に1例だけあり、大正2年『死の家』では、(15)の女学生弓子の発話に1例だけあった。

(14)車が止まってお嬢さんが降りた。「どうしてけふは遅くなったの」と母が問ふ。「知らないわよ。わたくしいつもと同じだと思つてゐましたの。けふは先生が講義が早く済んだからお話をして遣ると仰やつて、いろんな面白い事を聞かせて下さいましたの。それで遅くなつたのでせうか。」待たれた娘の方は頗る気楽なものである。 (種子→母)

(15)「それからばあやの食べられさうなお菓子を色々持つて來てよ。牛乳の中へ入れる様にと思つて、ココアもあるのよ。それから婆あやが寝てゐて眺める様にと思つて、造花を持つて來たの。まだ稽古し立てだから随分まづいわよ。ほら、つづき茨に菊に桔梗に朝顔に蓮。これで習った丈みんなよ。」 (弓子→乳母)

『灰燼』は回想によって語られていることと、作品自体が未完であること、また『死の家』は短編であるということもあって、発話者の背景を描き尽くせない部分もあるが、いわゆる一般的なお嬢さんである女学生の発話である。両例とも、ストーリー展開上の特殊な場面に用いられているわけでもないので、ここでの「わよ」の使用が文体的効果を狙ったものである、ということも考えにくい。

ただ『灰燼』には「新坂町の活花の師匠の所で、お種さんと稽古友達となった

赤坂のお酌」という人物が登場するように、この頃には居住する地域や学校以外において、層の異なる者同士に交流する機会があったことが示唆される。

用例が少ないため、「わよ」が女学生のことばとして一般的なものであったと断定することはできないが、作者である鴎外・しげ夫妻にとって、執筆時の当時である大正初期にはすでに、女学生が「わよ」を用いるということには抵抗がないことであったということが窺える。

### 3.3. その他の女性のことば

花柳界の者でもなく、女学生でもない、女性のことばに「わよ」を用いている例は、今回の調査では明治40年より表れ、泉鏡花では『婦系図』に(16)のような例があった。

(16)「英吉君には御懇親に預ります、早瀬主税と云うものです。」と青年は衝と椅子を離れて立ったのである。「まあ、早瀬さん、道理こそ。貴下は、お人が悪いわよ。」（菅子→主税）

菅子(26歳)は元々静岡の出で、地元では「某女学院出の才媛」と名高く、この女学生時代は「牛込南町」で過ごしている。理学士の夫が東京へ出すのは許さなかったので「雑と二年越、上野の花も隅田の月も見ないで」静岡にいたとあるが、菅子の発話にとりわけ静岡のことばとして特徴付けられるものが用いられているわけではない。なお、この『婦系図』には芸者のお蔦など花柳界に関わる者も度々登場するが、「わよ」の使用例は菅子の1例以外にはない。したがって明治40年当時の鏡花の意識において「わよ」が花柳界のことばであったという感覚はなかったものと判断される。

同じく明治40年に夏目漱石では『野分』に(17)の1例がある。この他に漱石が明治期に「わよ」を用いた例は、明治45年に『彼岸過迄』で内幸町に住む百代子に(18)の1例だけあった。

(17)「ずるいわ、あなたは、他にこれ程馳けずり廻らせて」「旨いものも、ない癖に」「あるわよ、あなた。まあいいから入らっしゃいてえのに」とぐいぐい引っ張る。塩瀬は羽織が大事だから引かれながら行く、途端に高柳君に突き当った。（襷掛けの女→塩瀬）

(18)「まだ間に合わない事はない。誘って来るなら来ると好い。僕は先へ行って待っているから」「もう遅いわよ貴方。高木さん、もし入らっしゃる積なら屹度一人でも入らしってよ。後から忘れましたって詫まったらそれで好かないの」 (百代子→須永市蔵)

しかし、大正期になってからの漱石の作品には、大正元年『行人』(19)～(24)、大正5年『明暗』(25)～(29)のように、多くの例がある。

(19)「そうして早く奥さんをお貰いなさい」と彼女の方から又云った。自分はそれでも黙っていた。「早い方が好いわよ貴方。妾探して上げましょうか」と又聞いた。 (お直→義弟の次郎)

(20)彼は返事を受けるまで順々に聞いて廻るらしかった。お重はすぐ「岡田さん、貴方いくら年を取っても饒舌る病気が癒らないのね。騒々しいわよ」と云った。 (お重→岡田)

(21)考えながら、煙草の灰をマジョリカ皿の中へ遠慮なくはたき落した。お重は厭な顔をした。「それペン皿よ。灰皿じゃないわよ」 (お重→兄の次郎)

(22)「兄さんはそれでも能く思い切って旅に出掛けましたね。僕は殊によると今度も亦延ばすかも知れないと思ってたんだが」「延ばしゃなさらないわよ」嫂はこういう時に下を向いた。 (お直→次郎)

(23)自分は又調戯たくなった。「御客さまだと思うなら、そんな大きなお尻を向けないで、早く此処へ来てお坐りよ」「蒼蠅いわよ」 (お重→次郎)

(24)慥な筋という様な一種の言葉が、お重の口から出るのを聞いたとき、自分は思わず苦笑した。「馬鹿だなお前は」「馬鹿でも可いわよ」 (お重→次郎)

(25)「時に貴方御いくつ？」「もう沢山です」「沢山じゃないわよ。一寸伺いたいから伺ったんだから、正直に淡泊と仰ゃいよ」「じゃ申し上ます。実は三十です」 (吉川の妻→津田)

(26)「そう云う訳でもないですが、何だか意味のあるような、又ないような訊き方をして置いて、わざとその後を仰しゃらないんだから」「後なんかあり

ゃしないわよ。一体貴方はあんまり研究家だから駄目ね。学問をするには研究が必要かも知れないけれども、交際に研究は禁物よ。あなたがその癖を已めると、もっと人好のする好い男になれるんだけれども」

（吉川の妻→津田）

(27)「継はね……」と母が云いかけたのを、娘はすぐ追被せるように留めた。「止して頂戴よ、お母さま。そんな事此所で云っちゃ悪いわよ」

（継子(20歳)→母）

(28)百合子はすぐ自分の手に持った此方のオペラグラスを眼へ宛てがった。「居ない、居ない、何処かへ行っちまった。あの奥さんなら二人前位肥ってるんだから、すぐ分る筈だけれども、矢張り居ないわよ」

（百合子(14歳)→姉の継子）

(29)「だって自分より外の女は、有れども無きが如しってような素直な夫が世の中にいる筈がないじゃありませんか」雑誌や書物からばかり知識の供給を仰いでいたお秀は、この時突然卑近な実際家となってお延の前に現われた。お延はその矛盾を注意する暇さえなかった。「あるわよ、あなた。なけりゃならない筈じゃありませんか、苟くも夫と名が付く以上」（お延→お秀）

人物像や言葉遣いについては、『行人』のお重に対しては「お重という女は議論でも遣り出すとまるで自分を同輩の様に見る、癖だか、親しみだか、猛烈な気性だか、稚気だかがあった。」という次郎の評価が、『明暗』の吉川の妻に対しては「細君の言葉には遠慮も何もなかった。彼女は自分の前に年齢下の男を見るだけであった。そうしてその年齢下の男はかねて眼下の男であった」、百合子に対しては「帯を高く背負った令嬢としては、言葉が少しも余所行でない」という評価が地の文にある。

また、漱石の「わよ」の用法としては、(17)(29)の「ない」に対して「ある」、(18)の「まだ」に対して「もう」、(22)の「延ばすかもしれない」に対して「延ばしゃなさらない」、(25)の「沢山です」に対して「沢山じゃない」、(26)の「後を仰しゃらない」に対して「後なんかありゃしない」等、相手のことばを強く打ち消す場面や、相手の思惑と異なる事実を提示する場面や、相手のことばを封じ込める場面に多く用いられている。

用例に傾向が現れたことから、漱石は「わよ」について「地域差」「職業・階

層差」があることばとしては考えておらず「相手に対して遠慮のない言葉遣い」として認識していた、と考えられる。

明治期に比べ、大正期になると、この他にも「わよ」の例がある作品および用例数が徐々に増えてくる。ただし使用者層については、以下の表のように、中流以上の家庭の女性だけでなく、労働者層または下町住まいの貧困層にも用いられていることがわかる。

表

| | 資　料 | 「わよ」使用者 | 用例数 |
|---|---|---|---|
| 大正3年 | 三十三の死 | 子供 | 1 |
| 大正5年 | 工場法 | 元女工(貧困層)、女工 | 33 |
| 大正5年 | 死者生者 | 甲州訛りの八百屋の主婦 | 2 |
| 大正9年 | ビルロストロのように | 三浦半島で暮らす人妻 | 2 |
| 大正10年 | 母 | 上海で暮らす二人の若い母親 | 4 |
| 大正10年 | 招魂祭一景 | 曲芸師 | 2 |
| 大正11年 | 性慾の触手 | 人妻(31歳)、小説家(31,2歳か) | 3 |
| 大正12年 | 子を貸し屋 | 銘酒屋の女(私娼) | 10 |
| 大正12年 | 生まざりしならば | 看護婦、元芸者 | 2 |
| 大正13年 | 痴人の愛 | 元女給 | 80 |
| 大正14年 | 寡婦とその子達 | 子供、母親、母親(貧困層) | 8 |

以下、これらの「わよ」の用法について、注意すべき点を挙げる。

『工場法』では、「てよ」4例、「わね」7例に対し「わよ」は、元女工で深川の裏長屋に住み、工場労働者を夫に持つお時(22,3歳、新潟出身)に21例、その朋輩で現役女工のお倉(同郷)に12例あった。中には、昭和期に用いられてきた用法とは異なる例がいくつかあった[*5]。しかし、ここから当時の「わよ」の用法を抽出しようとするのは、同時代の他の作品と比較して考えても適当ではない。『工場法』は社会主義的な啓蒙を目的に書かれたものであるという作品の性質上、作者平沢計七にとって細かい用法の違いにまで気を配る必要がなかったということも考えられる。

「ですわよ」は、大正11年、『性慾の触手』に「男次第で女はどうにでもなる

*5 ・お倉「ホラおときさんは斯様云つたぢやないか〈略〉しちやいけないつてね」
お時「そんな事も云つたわよ」
・お時「まあ可哀相にやせたわよ、やつぱりお乳の薄いせいだわね。」

ものですわよ」の例にみられ、「ますわよ」の例は、大正10年『招魂祭一景』に「おかみさん、お留さんが来ましたわよ」の1例、大正12年、『子を貸し屋』に「ね、お上さん行つて來ますわよ…」という1例と、『生まざりしならば』で「主婦さんに聞いてよく知ってますわよ」の1例にみられた。

大正13年の『痴人の愛』では、すべてナオミの発話で、「てよ」が1例、「わね」が12例であるのに対し、「わよ」は今回調査した資料の中で最も多くあった。ナオミは親から「芸者にする筈」で育てられた元女給であるが、まだ譲治と出会い共に暮らすようになって間もない比較的素直なころには「わよ」の例は少ないが、次第に生意気になり、要求がエスカレートし、奔放になるにつれ、「わよ」を多発するようになっていった。

もっとも本稿で考察の対象とした資料の中では、「わよ」の用例が全くないものもあるように、作中人物像や作家によって傾向があるが、大正期においては、徐々に様々な層の女性に「わよ」が用いられるようになってきていたといえる。

## 4. おわりに

本稿の考察から、少なくとも文学作品を発表する表現者側からは、明治30年代においては「わよ」は花柳界のことばとして意識されていたこと、明治40年代から徐々にその意識がない作者もあらわれてきたこと、また読者一般にとっては大正期には「わよ」を目にする機会も増えてきていたであろうことが明らかになった。

実際の使用でも、巌谷家で母親が強い不快感を示しているのに対し、明治40年代以降に言語形成期を迎えた当の娘たちは、抵抗なく受け入れ「よく小言を言われ」ながらも使用していた、という母娘間の「わよ」に対する意識の違いは、この変化を背景にした、世代差を反映するものであると思われる。

最後に文法的な問題としての「わよ」について、今後の課題を含めて述べる。

女性のことばを特徴付ける文末表現には「わ」「こと」「もの」「の」等がある。これらは、渡辺(1967)の相互承接関係でいう第一類の「よ」、第二類の「ね」が承接して「わよ／わね」「ことよ／ことね」「ものよ／ものね」「のよ／のね」という相互承接形を生成する。また明治後期から昭和前期に用いられてきた文末表

現の「てよ」[*6]も、形態的に分析するならば「(連用)て」形に第一類の「よ」が承接したものであり、第二類の「ね」との承接形「てね」も、今回調査した資料の中でも「貴方先刻小供がないと淋しくって不可ないと仰しゃってね」(明治43年『門』(お米→夫の宗助)) というような例が確認された。資料の上での傾向であり、必ずしも現実を忠実に反映するものであるというわけではないが、この「てね」は、極く稀にしか用いられないものであった。

したがって、「わよ」を使用することが忌避されていた頃には、一般女性の「わ」「(連用)て」の、「よ」「ね」との相互承接形は、図1が示すように、体系として不統一なものであったということになる。

図1

| | ＋よ | ＋ね |
|---|---|---|
| わ | わよ | わね |
| て | てよ | てね |

→

図2

| | ＋よ | ＋ね |
|---|---|---|
| わ | わよ | わね |
| て | てよ | てね |

→

図3

| | ＋よ | ＋ね |
|---|---|---|
| わ | わよ | わね |
| て | てよ | てね |

やがて一般女性にも「わよ」が用いられるようになり(図2)、「てよ」が衰退を迎える(図3)という変化は、体系の統一性を指向する動きであったと考えられる。この影響関係に関する問題についての詳細な検討は、今後の課題としたい。

田窪・益岡(1992)「ことばの男女差」の説明の中で、「「わ」は、自分の感情や、ある事柄に対する自分の印象を独り言のようにして相手に伝える表現であり、主に女性的表現として用いられる。」とした上で、「わよ」に関することとしては次のような記述がある。

> 「だ」「よ」のように、普通は男性的表現として使われるものでも、「だわ」「わよ」のような組合せでは、女性的表現として用いることができる。これは「わ」を加えることで、自分の印象に過ぎないという意味合いが出るため、相手に対する強い主張を弱めることができるという点に起因するものと考えられる。

この説明は、本稿の考察より通時的問題として捉え直すと、「わ」のみ単独での使用では「独り言のように」「自分の印象に過ぎないという意味合い」であっ

*6 遠藤・尾崎(1998)の調査では、「てよ」は昭和30年までの使用例はみつかったが、それ以後のものはない、とある。

たところを、「よ」との承接によって「相手に対する強い主張」としての用法を獲得することができた、と言い換えることができる。

**参考文献**

石川禎紀(1972)「近代女性語の語尾「てよ」・「だわ」・「のよ」」『解釈』11月号
巌谷大四(1964)「敬語雑感」『放送文化』8月号
遠藤織枝(1994)「若い女性のことば――論評で綴るその昭和史――」『日本語学』10月号
遠藤織枝・尾崎善光(1998)「女性のことばの変遷」『日本語学』5月号
紀田順一郎(2000)『東京の下層社会』ちくま学芸文庫
小松寿雄(1988)「東京語における男女差の形成――終助詞を中心として――」『国語と国文学』11月号
鈴木英夫(1976)「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」『国語と国文学』11月号
鈴木英夫(1998)「現代日本語における女性の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店
田窪行則・益岡隆志(1992)「第Ⅴ部第2章ことばの男女差」『基礎日本語文法――改訂版――』くろしお出版
田中章夫(1983)『東京語――その成立と展開――』明治書院
田中章夫(1999)『日本語の位相と位相差』明治書院
田野村忠温(1994)「終助詞の文法――江戸語資料に見る終助詞の体系性――」『日本語学』4月号
中野伸彦(1999)「江戸語における終助詞の相互承接」『近代語研究10』武蔵野書院
西山松之助編(1979)『日本史小百科〈遊女〉』東京堂出版
松村　明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂
南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
森　銑三(1969)『明治東京逸文史』東洋文庫
森野宗明(1991)「女性語の歴史」『講座日本語と日本語教育10』明治書院
山本正秀(1965)「近代小説の女性語」『解釈』12月号
渡邊　実(1967)「終助詞の文法論的位置」『国語学』72号

（2000年7月4日　受理）